



宿道（国頭方東海道）発掘調査 現場一般公開

平成20年（2008年）7月11日（金）～13日（日）

金武町教育委員会

1. 発掘調査に至る経緯

【平成18年】

10月 億首ダム予定地周辺の文化財分布調査で宿道（国頭方東海道）をはじめて確認。

10月～ 現地保存について、
関係機関で検討協議。



【平成19年】

2月 宿道一般公開を実施。

7月 関係機関で協議を重ねた結果、現地保存は
きわめて困難との結論に至る。

12月 宿道発掘調査の協定をダム事業者と締結。

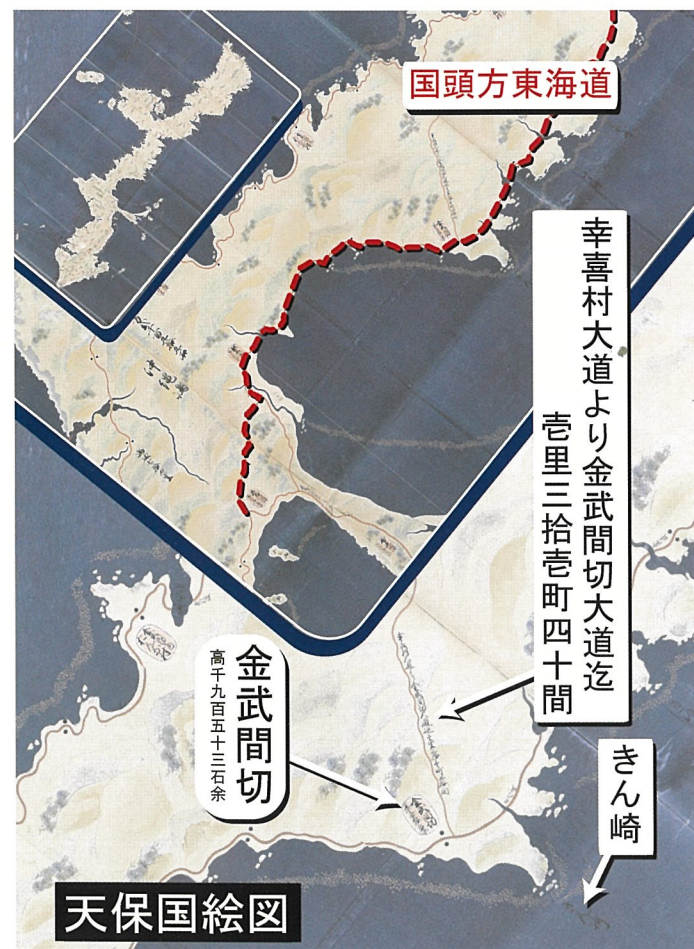
【平成20年】

4月～ 発掘調査に着手。

2. 金武の宿道

首里を起点とする琉球王府時代の宿道(すくみち)は、沖縄本島各地への幹線道路でした。

金武間切には、そのうちのひとつ「^{くにがみ ほうとう かいどう}国頭方東海道」が通っていました。1838年頃に完成と伝わる天保国絵図にもそのルートが描かれています。



3. 文献等にみる金武の宿道

金武間切と呼ばれていた頃の金武の宿道については、幕末に来琉したペリー艦隊一行らの記録や地域に伝わる歌謡、組踊の道行（みちゆき）にも登場します。

現在、発掘調査を行っている場所は、交通の難所でもあり、明治14年に県内を視察した県令 上杉茂憲の記録などの文献から当時の様子がよくうかがえます。



我々はやがて松並木の美しい幅広い街道に入った。
その道の果てに一軒の広い家を見つけた。
その傍らには小さな仏寺があった。

①-1

（意訳） 県令の駕籠かきがつまづき、後ろから続々と押し寄せた。その時県令は狂歌を口にした。
「県令の駕籠も坂にてつまづけり
あとよりせまる人のがやがや」

れいいう こし つまづ
令公たふたふ輿う蹶くク、後輿う続々圧迫ス、
令公適マ狂歌ヲ口号セラル
「県令の駕籠かも坂にて蹶けり
あとよりせまる人のがやがや」

Figure 1 is an aerial photograph showing a coastal area. A red line runs horizontally across the middle of the image, likely representing a boundary or a specific feature. Below this line, there is a dashed orange line that follows a similar path but is slightly offset. A white arrow points downwards from the top center of the image towards the red line. The background is a grayscale aerial view of the terrain, showing various features like roads, fields, and possibly water bodies.

金武・並里の「宿道」にまつわる場所
(昭和19年米軍撮影航空写真との重ね図)

北二向ヒテ行コト数丁
 右辺ノ海上片帆煙雲ノ間二点ス
 恩納ノ山翠興窓ノ左二簀へ相送ルカ如シ
 (意訳) 北に向かつて進むこと数百メートル、
 右手に望む海上には横風を受けた舟の帆が
 霞(かすみ)の中になんと浮かんでいる。
 興の窓越しに左手を望めば、
 青々とした恩納の山々がそびえ
 (まるで我々を) 見送っているようだ。

午前九時五分金武番所ヲ発ス（中略）
 薯^{さつ}圃^ぼ中ヲ行クコト数丁（中略）
 此^こ處^こ曾^{さへ}テ開墾シタル曠漠^{こくはく}ノ圃アリ
 皆蕃薯^{はんしよ}ヲ栽ユ
 （意訳） 午前9時05分金武番所を出立（中略）
 サツマイモ畑のなかを行くこと数百メートル（中略）
 この辺りはかつて開墾した広々とした畑があり
 みなサツマイモを栽培している

上-2
(意訳) 道を右に折れて数百歩進むと観音寺に至る。金武番所かと思っほどに立派である。

路右ニ折レテ行コト数百歩、
観音寺アリ、番所カト疑ヘリ

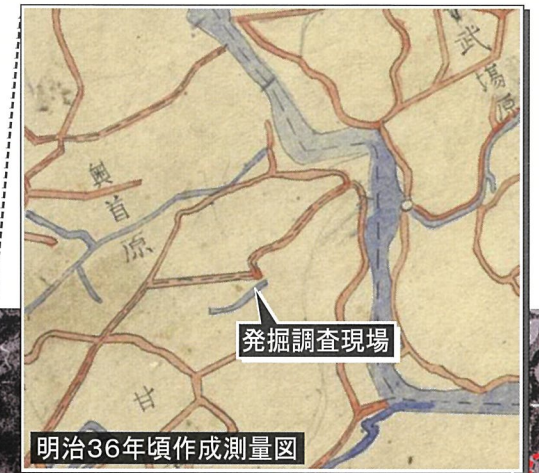
彼の後について部落を通り、ある公館（番所）を訪れた。それは我々がかつて見たどれよりも大きく立派であった。

路右ニ折レテ行コト數百歩、
觀音寺アリ、番所カト疑ヘリ
(意訳) 道を右に折れて數百歩進むと
觀音寺に至る。金武番所かと
思うほどに立派である。

彼の後について部落を通り、ある公館（番所）を訪れた。それは我々がかつて見たどれよりも大きく立派であつた。

 現在確認できる宿道の経路
 推定経路

タテ書きは、上杉県令および尾崎三良の巡察時の記録
 (①「上杉県令沖繩巡回日誌」、尾「明治十五年琉球行日誌」)
 ヨコ書きは、ペリー一行の「沖繩訪問記」



4. 宿道発掘調査の様子

どのような方法で・どのように宿道の発掘調査が行われているのか、実際の写真とともにその様子を紹介します。



④遺構の掘り下げ

宿道が構築される前はどんなだったのか断面の観察結果を踏まえながら平面的に掘り下げていきます。



③遺跡の構造の確認

宿道の構造はどうなっているか、いつ頃つくられたのかなどを調べるため、必要な箇所を溝状に掘り下げてその壁面を観察します(断面の観察)。平面の時と同じように写真と図面で記録します。



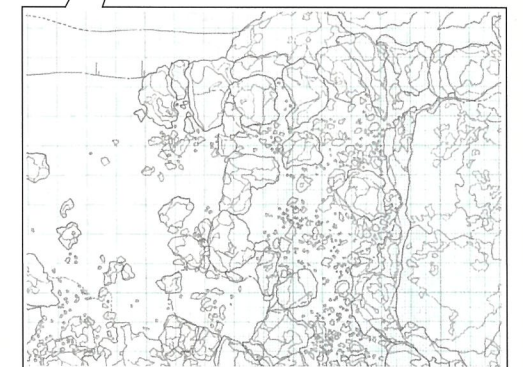
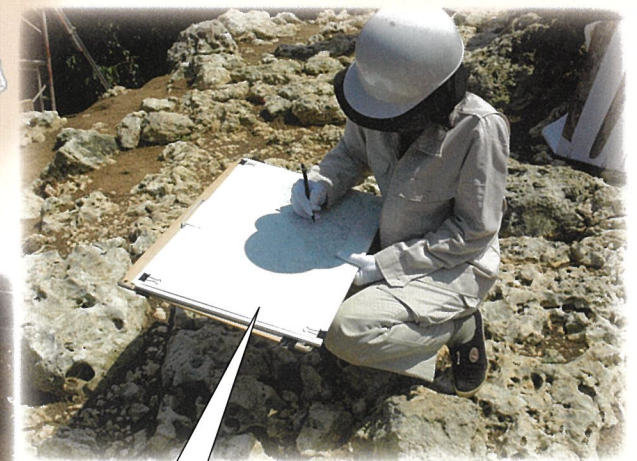
①表土の掘り下げ・宿道の検出

宿道廃絶後～現在の間に積もった土をいねいに剥がしながら、下に当時の路面が残っているのか慎重に確認していきます。



②写真や図面等による記録

当時の路面が確認されたら、写真撮影や正確な計測にもとづく実測図面の作成により、詳細に記録していきます。



5. 発掘調査の成果（これまでにわかった事）

H18 年度の予備調査で
確認した範囲



調査の範囲



上空からみた調査区



作業風景

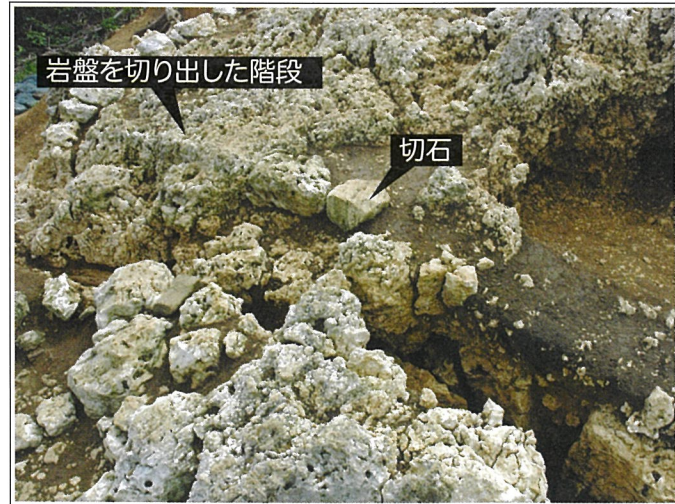
発掘調査区の平面図

今回の発掘調査で、これまでに明らかになった事柄を整理して紹介したいと思います。

（1）宿道の下部構造について

平成18年度の予備調査で確認された宿道遺構について、溝状に断ち割って路面下および断面の観察を行いました（右と下の写真）。

自然の石灰岩岩盤を丁寧に加工・形を整え、岩盤の隙間など足りない部分に裏込めの細かい礫（れき）を敷き詰めた後に切石で補うなど、宿道の構築過程をうかがうことができました。



岩盤を切り出した階段

切石



岩盤の隙間を埋めている

（2）宿道のつづきとみられる礫集中面

宿道がどれほどの範囲で・どのように残っているかを確認する事も今回調査の目的です。

前回確認された宿道の続きとみられる、礫（れき）が密に敷かれた礫集中面のひろがりを確認しました。

また礫集中面が上下に2枚重なる場所も確認され、時期の異なる可能性（下位が古い）も考えられます。

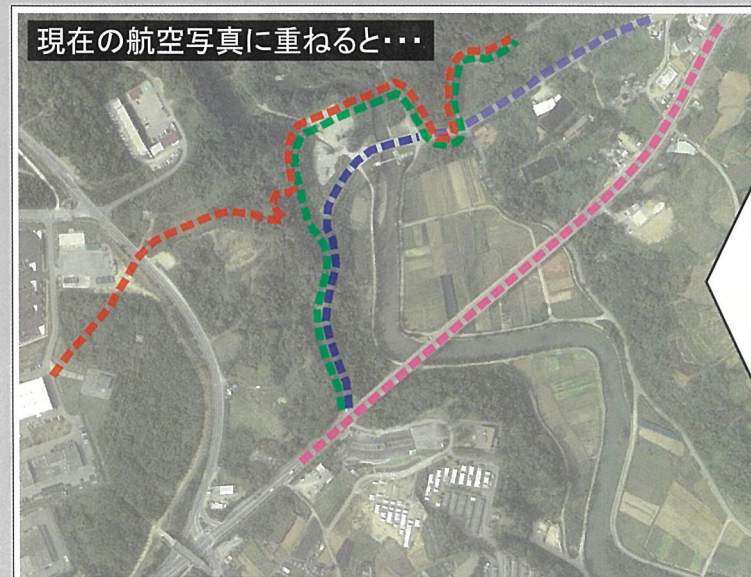


上位の礫集中面

下位の礫集中面



現在の航空写真に重ねると・・・

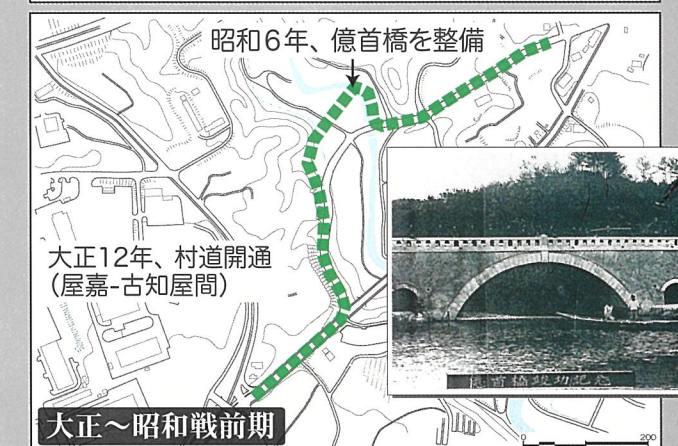


（3）宿道以後の主要道の遷り変わり

H18年度予備調査と今回の調査から、宿道以後の主要道の遷り変わりをみる事ができました。



近世～明治期



昭和6年、億首橋を整備

大正12年、村道開通
（屋嘉-古知屋間）

大正～昭和戦前期



戦後に米軍が道路を整備
復帰後に国道329号となる

戦後



昭和57年頃に金武大橋を架設
直線コースで楽に渉れるようになる

現在

国道金武バイパス建設で
近い将来もうひとつ架橋予定

— ヨモ —

